

4 静岡学問所之碑

駿河府中藩は1868年10月、藩の人材養成を目的として、駿府城四ツ足御門にあった元定番屋敷内(現在の静岡地方合同庁舎付近)に府中学問所を創設。学問所は翌年、駿府が静岡に改められて静岡学問所となりました。

この学問所には、向学心に燃える者は身分を問わず入学が許可され、向山黄村、津田真一郎、中村正直、外山捨八など旧幕府の教育機関に所属していた学者たちが国学・漢学・洋学を教授し、旧幕府の蔵書も移管。アメリカ人教授E.W.クラークは専門の理化学のほか哲学や法学も教えました。

1872年8月の学制施行とともに廃校となり、洋学系の教授の多くは新政府に登用され、活躍しました。

学問所の蔵書は「葵文庫」として静岡県立中央図書館に保管されています。



5 西草深公園(徳川家達邸跡)

1868年4月29日、当時6歳の田安亀之助は徳川宗家を相続し、5月24日に徳川家達と改名して駿府城主となり、70万石を下賜されると、8月9日に江戸を出発し、8月15日に駿府に到着。宝台院を参拝し、慶喜公に対面された後、駿府城の元城代屋敷(旧青葉小学校(教育会館)に入りました)。

翌年7月20日、家達公は浅間神社前(石鳥居脇)の新宮兵部(浅間神社の社家)の屋敷に移られ、1871年8月28日に東京へ帰住されるまで、ここにお住まいになりました。現在は、西草深公園として整備され、市民の憩いの場になっています。

1888年、東海道鉄道の開通を前に、慶喜公は喧騒を避けて、家達邸の東側に新しい屋敷を構え、東京に戻る1897年まで約10年住まわれました。



6 「尚志」の碑

中村正直は江戸幕府の教育機関である昌平坂学問所で学び、1866年に幕府がイギリスに留学生を派遣するときに取締として同行しました。幕府瓦解により帰国する際、親しくしていたイギリス人から餞別として贈られた書物が『Self Help』。

帰国後、中村は駿府に移住し、1868年に府中学問所の一等教授となり、富春院(静岡市葵区大岩本町26-23 城北公園むかい)の北側に半洋式の「雑農軒」と称する住宅を新築。この静岡滞在時代にS・スマイルズ著『Self Help』の訳書『西国立志編』、J・S・ミル著『On Liberty』の訳書『自由之理』を出版しました。

邸宅跡には「中村敬字先生旧宅跡」の石柱、富春院の門前には中村が書いた「尚志」の碑が建てられています。



● 渋沢栄一



1840(天保11)~1931(昭和6)
現在の埼玉県深谷市血洗島の農家に生ま

れ、畑作、藍玉作り、養蚕を手伝う。「尊王攘夷」思想の影響を受けた後、京都で一橋慶喜公に仕え、一橋家の家政を改善。1867年、慶喜公の弟昭武に随行して欧州諸国の実情を見聞。翌年末、帰国した渋沢は駿府で慶喜公に拜謁し、静岡藩の財政を立て直すために商法会所を設立。1869年末に新政府の大蔵省の官僚となり、辞職後は、第一国立銀行を拠点に、株式会社組織による企業の創設育成に力を入れ、470余の企業に関わった。

● 中村正直



1832(天保3)~1891(明治24)
幕臣の子として江戸に生まれ、昌平坂学問

所に学び、幕府の儒官となったが、さらに洋学を学び、1866年、英国留学。幕府瓦解を知って帰国し、駿府に移住。1868年10月に開校した府中学問所の教授(漢学)に就任。1870年~1872年、スマイルズ『西国立志編』、ミル『自由之理』を静岡で翻訳し、出版。『西国立志編』は数十万冊が出版されベストセラーとなった。静岡学問所の廃校直前に上京し、大蔵省翻訳御用を務め、1881年、東京帝国大学教授に就任。